

“笑顔”つなぐ

はままつの  
ユニバーサル農業

ホットファーム株式会社

# 梅林 泰彦



上：出荷調整のほか、生産管理にも携わる障がい者スタッフの力は大きい。  
下：完熟収穫にこだわり、甘みと酸味のバランスに定評のある「アップルスター」は、地域産のブランドトマトとして定着している。

## profile

2010年、農業法人として設立し、西区庄和町でトマトの生産を中心に行うホットファーム株式会社の統括マネージャー。農産物の流通・販売、飲食店事業など、農業と食に関する多くの事業に携わる。福祉施設「和光会」との連携により、多くの障がい者スタッフとともに事業運営を行っている。

### ■福祉施設との連携で農業をスタート

当社は、平成22年にこの浜松で設立した農業法人です。作目は、トマトの生産を中心に行っていて、「アップルスター」という名称で浜松のブランドトマトとして展開をしています。また、現在は地域の方々から農産物の出荷をお願いされることもあり、生産から流通、飲食店など様々な事業を展開しています。

当社の特徴は、障がい者福祉施設である「和光会」との連携によって様々な事業を行っていることです。主には農産物の出荷調整をお願いしていて、西区志都呂町にある事務所を和光会さんとシェアし、ここを出荷調整の作業場兼当社の事務所として、当社の社員と和光会さんの障がい者スタッフが一緒に働いています。

### ■障がい者スタッフとの連携で生まれた強み

当初は、やはり苦労する部分もたくさんありました。また、障がい者さん達にどのような形で作業を担ってもらうか、手探りで事業を運営しながら、独自の出荷規格で営業活動を行うようになったことから、お客様の細かなニーズに答えられるようになりました。これは大きな強みだと思います。

また、出荷調整に要する時間も、従来より驚くほど短くなりました。傷などの状態を判断する「選別」の作業、重さを判断する「計量」の作業、袋に入れる「商品化」の作業を明確に分けて、それぞれの作業を得意とするスタッフが担うことでスピードは格段に上がりました。

一般的には、既存の出荷規格に合わせるのが普通で、こうした面倒なことはとてもやりきれないと思うんです。でも、当社にとってはむしろこの形のほうが自然なのです。従来の常識にとらわれず、スタッフみんなの特性を活かすことで、自然に生まれた事業モデルはないかと思えます。

### ■大切なのは、正確な作業指示と適材適所

障がい者さんたちとともに働くようになったことで自分自身に生まれた変化は、うまくいかないことがあったとき「全部自分のせい」と思うようになったことだと思います。

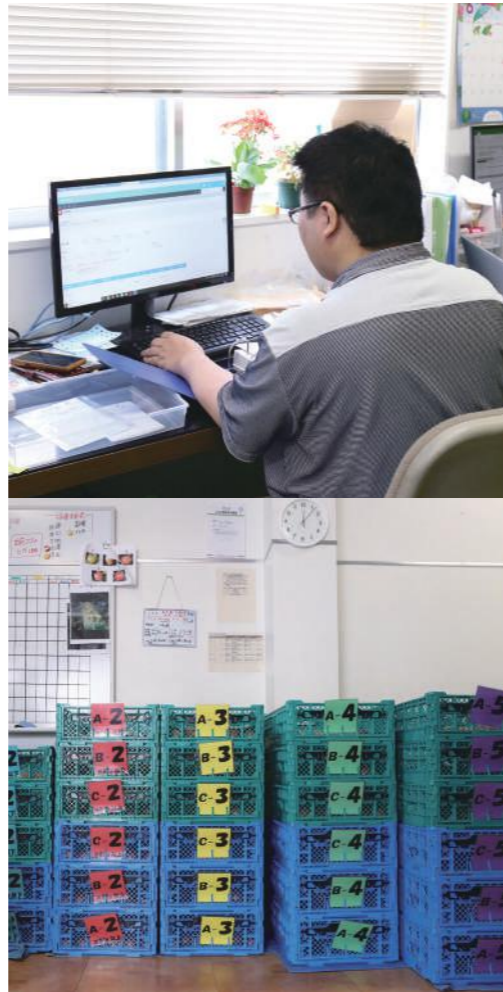
障がい者さんに合わせた事業モデルを作っていました。一例として、障がい者の方々に主に担っていただいている農産物の出荷調整をご紹介します。出荷調整とは、収穫したトマトを、傷などの状態や重さなどによって仕分け、袋に詰めて出荷できる状態にする作業です。一般的なトマトの出荷規格は、S・M・Lなどがあり、規格にあわせた重さのトマトを選んで割り当てるのですが、だいたい何グラムというアバウトな感覚は障がい者さんにとって掴みづらいものです。当初は僕自身がその作業をしていましたが、例えばトマトを3個選び400gくらいの1セットを作る、といった作業には経験と感覚が必要で、実際とても時間がかかっていました。一方、障がい者さんたちは、1個のトマトを何gと測ること、そして、何g〜何gまでのトマトはこの箱に仕分ける、ということは、非常に正確にしてくれます。ですから、当社ではこうしたスタッフが得意な形に合わせた作業を最優先することにしました。結果、当社では出荷の規格はかなり細分化されています。ここからここまでの状態で、ここからここまでの重さのトマトがいくつ、という形で細かく区分されています。また、こ



左：周年出荷している浜松トマト「アップルスター」は、底面に現れるスターマークが特徴。生産規模も年々拡大している。

右上：データ入力や伝票処理を得意とするスタッフもいる。様々な個性を活かして、役割分担を行う。

右下：独自の出荷規格はかなり細分化されている。販売部門において、お客様のニーズにきめ細やかに対応できることが大きな強みとなっている。



和光会のスタッフが驚くほどのスピードでトマトを計量し、正確にグループ分けしてコンテナに詰めこんでいく。スタッフ間の連携も目を引く。



まわりの農家さんたちから頼られることも次第に多くなってきた。地域に根付いてきたことが率直に嬉しい。

農業というのはとても適していると思えます。生産から出荷まで、細分化することで色々な種類の作業がありますから。当社としては力を貸してもらいながら、障がい者さんたちは、この場で色々な作業を経験して、身につけることで、就職にもつながる。こうしたことも地域貢献の一環ですし、企業の役割だと思っています。

ホットファームでは、経営理念を「共生社会の実現に貢献する」と定めています。きれいごとにも見えてしまうかもしれませんが、社会に貢献できているという実感

は、組織に属する者にとって、やはり大きなやりがいにつながっていると実感しています。スタッフみんながそれぞれの強みを生かして取り組む私たちの活動が、今後社会にとって良い循環を生むことができれば嬉しいのです。

障がい者スタッフのみなさんは、本当に素直で真面目に働いてくれます。ただ、僕たちが的確な指示ができないと迷ってしまいます。最初はやはりその行き違いで苦労したこともありました。

ひとつひとつ正確に、具体的な説明を僕たちができれば、しっかりと成果を出してくれます。うまく作業が回らなかつた時には、「ああ、自分の説明が悪かつたんだな。次はもっとこういうふうな説明をしてあげよう。」と作業指示の改善を常に考えるようになりました。

自分と同じことのできるスタッフが相手であれば求め方も違つたかもしれませんが。でも、障がい者さんたちはできることが限られている、一方、それぞれに得意なこともある。

経営の視点で見れば、やはり適材適所が重要です。事業において必要な様々な工程があつて、得意な人が得意なことをする。すごくシンプルなことですが、それを基本にするのがホットファームのスタイルです。目の前の仕事をみんなですっかりとまわすために、作業を細分化して、その役割分担や効率のいい方法を構築するのが僕たちの役目だと思っています。

また、ホットファームが連携している和光会さんは、就労支援を目的とした施設です。ですから、障がい者スタッフのみなさんには、この場所をステップアップの場とし、社会に出て一層活躍して欲しいという想いを常に持っています。そういう意味でも、

## ■ これからの地域社会と、企業の役割

平成22年に当社ができてから約10年。次第に地域にも根付いてきて、他の農家さんから出荷を請け負うことも増えてきました。それが、今の流通事業に発展していて、ホットファームが自社で生産するものだけでなく、他の農家さんから仕入れたものも販売店さんに卸すようになりました。

地域の農家さんたちも高齢化していて、何もかもを自分ですることが難しくなつてきています。僕たちは企業として、農業を通してできることを自然とさせてもらつてきたものですが、喜んでくれる農家さんがたくさんいらっしゃいます。こうしたことが地域貢献につながっていることは、スタッフ一同とても喜びを感じています。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

板橋工機株式会社

# 河合 浩史



右：河合社長(右)と、京丸園を担当している社員のエンジニア・勝又さん(左)。

左上：作業現場の課題を解決するためには、現場の徹底的な状況確認が大切となる。

左下：障がい者、健常者に関わらず、だれにでも扱いやすいユニバーサルデザインを目指す。

## profile

静岡県沼津市で省力化機械や荷役機器の設計製作を行う板橋工機株式会社の代表取締役。浜松市のユニバーサル農業における課題研究に取り組み、京丸園㈱における障がい者の作業機械の開発を行う。「人を活かす機械づくり」をコンセプトに、現場に適応した機械の設計・製造を行う。

### ■省力化機械の開発で、現場の課題を解決する

当社は、静岡県沼津市で省力化機械や荷役機器の設計製作を行っている会社です。板橋工機の名前は、祖父が東京の板橋区で起業したことから由来しています。省力化機械と一口に言っても様々な種別がありますが、私たちが専門にしているのは、製造ラインを円滑につなぐための機械開発です。製造業における工場での機械開発などが主ですが、浜松市のユニバーサル農業に関わることで、現在は農業現場における機械の開発にも携わらせていただいています。

私たちが経営理念としているのは「現場の課題を解決することです。お客様からいただくご要望は、どれひとつ同じではありません。ですから、お客様の事業の特性や、現場の状況などを細かく把握し研究

機ですが、これは早く移動すると虫を吸うことができません。障がいのある方に合わせ、できる限りゆっくりと動く機械の開発でした。機械メーカーの私たちにとっては、機械はとにかく高速で作業できるものを作る、というのが常識です。できるだけゆっくりと動かすことを目指すというのは、実は衝撃的な出来事でした。また、普通はだれが扱っても均一に作業ができる機械を作ります。でも京丸園さんでは、あくまで作業する人にあわせて作ります。

これは、農業においては自然任せな作業も多いため、製造業と比べてすべてを自動化するのが難しいという事情もあります。どうしても人の手が必要ですし、多様な作業があります。だからこそ、障がいのある方が担える部分が多くありますし、私たちの機械が貢献できる役割もあると感じています。その後、京丸園さんでは、色々な機械を作らせていただきました。苗作りのパネルに水を浸透させる機械や、ねぎのスポンジ分離装置、出荷調整のためのコンベア、また以前から改良を重ねているトレー洗い機は今三代目になりました。

また、最近では、収穫したチンゲンサイの根を切る機械を開発しまし

させていたがながら、課題を解決できる機械の開発をオーダーメイドで行っています。農業における現場の課題も、農園によって様々です。また、課題も農業ならではのものばかりで、日々刺激を受けながら開発に携わらせていただいています。私たちが浜松市のユニバーサル農業に関わるようになったのは、多くの障がい者を雇用して農業経営をされている京丸園さんとの出会いがきっかけでした。

### ■京丸園とともに開発してきた様々な作業機械

農福連携へ関わるようになったのは、京丸園さんで他社さんが作られた「虫トレーラー」という機械の検討チームに加わったのが始まりです。苗の上に掃除機のような機械を手動で走らせることで害虫を吸い取る機

た。水耕栽培のチンゲンサイは、栽培用のパネルに植えて育てますが、これを収穫する際、長い根がついたチンゲンサイをひとつずつ引き抜いてカットするのは大変な作業です。そこで、収穫したチンゲンサイが植えられたままのパネルが、出荷調整ラインに入る途中の行程で、根を一次カットする機械を開発しました。機械が行うのは一次カットで、障がい者みなさんがそのあと二次カットすることで、チンゲンサイは出荷できる状態になります。微妙に大きさが違うチンゲンサイに対し、出荷規格を満たすだけの精密なカットをする機械を作るのは大変ですし、開発にかかる投資も高額になってしまいました。でも、その作業は、精密な作業が得意な障がい者さんたちが力を発揮してくれました。私たちが開発する機械は、二次カットがしやすくなるためのつなぎの機能を円滑に果たせばいいのです。

### ■農業が気づかせてくれた、大切なこと

こうした農福連携の現場で生まれる課題と、解決のための試行錯誤は、私たちに大きな気づきを与えてくれ



左：当初開発した回転するブラシに抜き差しすることで効率よく洗浄できるトレー洗い機。現在は、横からスライドする方式でさらに効率性を高めたものを京丸園では使っている。障がいのある方がバランスを崩したときも対応できる安定性を備え、作業者に合わせて角度を変えられるなど、細部に配慮がなされている。



右上：苗作りのためのパネルに適切な水分量を加える機械も開発。農家にとって肝となる苗作りを、障がいのある方が扱いやすく行うために設計した装置には、試行錯誤と工夫が詰まっている。

右下：開発には、機械単体ではなくあくまで作業する人とラインの流れを念頭にすることが重要。作業環境や人の導線も、設計のための欠かせない情報となる。



ウレタンに植えられたチンゲンサイが、出荷調整ラインに入る行程で、根を一次カットする機械。2枚になったウレタンの1枚を分離させ、押し込むことで自動的に根がカットされる。



届け時のお客さまの嬉しそうな顔を見るのが一番の幸せ、とエンジニアの勝又さん。課題と喜びを共有できる社員たちと取り組めることが誇り。

毎日、天候も違えばできるものも少しずつ変わります。そういう現場に技術者が直接向き合い、現場で機能する機械を設計する。こうした課題解決を続けることで、板橋工機のエンジニア達に培われていくノウハウは、代えがたい資産だと思っています。それが、これから先の当社の一層の強みになっていくでしょう。そうした大切さを農業から教えてもらいました。

日々生み出しています。これからは、多様な方が多様な働き方を社会にするでしょう。そんな中で、働く人それぞれが活躍の現場を作りたい。経営には、省力化も必要ですし、合理化も必要です。その上で、人を活かせる機械を、私たちは今後でも作り続けていきたいと思っています。

ました。浜松市のユニバーサル農業に携わる前の私は、実をいうと今後の経営に悩んでいた時期でした。二代目として事業を引き継ぎ、クライアント様の経営の合理化に貢献することを理念に、一心に取り組んでいました。

一方で、私たちはこのままで良いのだろうか？という思いも持っていました。企業の存在意義は、社会貢献だと言われます。私たちの作る機械によって、クライアント様の会社では雇用人数を減らすことができ、経営の効率化が図られます。でも、それだけで本当に良いのだろうか？と、様々な経営の勉強会などに参加していました。

その勉強会の一つで出会ったのが京丸園さんでした。京丸園さんは、障がいのある方が個人の強みを活かし、だれもが生き生きと仕事をしています。仕事に取り組むこと自体が生みだすやりがいや、生きがい。浜松市のユニバーサル農業にかかわることで、何か新しいものを感じるものがありました。

業というのは、そればかりじゃないのかなと感じています。地域ごとに特色のある品目が作られていて、農園ごとに個性がある。それは人の手が多くを占めているからこそでもあると思います。

一方で、やはり農作業の現場では課題も抱えています。「今はこうしているんだけど、ほんとはもっとこうできるといいんだけどね。」というお話をお聞きし、私たちの役立てるところはそこだと改めて感じました。現場の課題をお聞きすることで生まれる、より効率よく、より快適に作業ができる機械。機械はあくまで人が扱う道具です。人を減らすための機械ではなく、人を活かすための機械。私はそこで、板橋工機が本当に大切にしたいことを気づかせてもらうことができました。

### ■農業との関わりで生まれた、新たな企業価値

機械メーカーの私たちはどちらかというと、作ったものを押し付けてしまう傾向があります。こういう機械だから、このマニュアルどおりに使ってください、といったことです。でも、農業はそうはいきません。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

株式会社カクト・ロコ

# 野末 信子



上：今年 OPEN した新たな事務所では、毎日多くの車や従業員が行き交う。  
下：男女共同参画の推進にも積極的に取り組んでいるカクト・ロコでは、正社員やパートなど、様々な形態で勤務する女性達が活躍している。

## profile

浜松市北区と長野県売木村で、多肉植物やイチゴ苗の生産を行う農業生産法人「カクト・ロコ」の会長。2004年から約15年間、社長として経営を担い、2018年10月からは会長職に就任。平成29年度男女共同参画社会づくり活動静岡知事褒賞の受賞や、第一期「未来をつくる女性活躍経営体100選(WAP100)」にも選ばれるなど、女性経営者として全国から注目を浴びている。現在105名の従業員を雇用し、うち4名が障がい者スタッフ。

## ■時代とともに転換を続けてきたカクト・ロコ

株式会社カクト・ロコでは、主に多肉植物を中心とした園芸植物を生産しています。会社の歴史としては、元々この浜松でのみかんの栽培からはじまり、その後は肥育牛の畜産を中心に行っていました。昭和64年に多肉植物に出会い、その魅力を広めていきたいと「野末サポテン」として生産を転換しました。現在は北海道から沖縄まで、全国にカクト・ロコの多肉植物をお届けしています。夫婦二人で取り組んできた事業でしたが、自分たちの想いを次代にも引き継いでいくため、平成16年に法人化を行いました。

カクト・ロコとは、スペイン語で「サポテンに夢中」という意味です。この見た目にも面白い植物を世の中に広めたい！とはじめた多肉植物の生産でしたが、現在では5ヘクタールもありませんが、次第に慣れ、2〜3年くらいで5時間働けるようになりました。そして1年半ほど前からは8時間のフルタイムで働けるようになって、今もはつらつと働いてくれています。仕事は、以前は主にポットへの土詰めをお願いしていましたが、現在は土作りを担って

もっています。最初は雇用したその子の変化には、目を見張るものがあります。まずは目つきが全く変わりました。以前はうつろだった目が、今はキリッとしてもしっかりとしています。当時はボサボサだった髪や汚れていた服装も今はとてもきれいにしていますし、自分の仕事にとっても責任感を持って取り組んでくれています。それに、後輩への指導や、配慮などもしてくれるようになりました。

当初は、ご両親が毎日送り迎えをしてここまで来ていました。でも、ご両親にとってそれはとても負担です。私は、まず自分で通えるように、「原付の免許を取ってみようよ」と提案しました。そこで彼は一生懸命勉強をして、試験を受けました。最初は一度落ちてしまっただけで、自信をなくしてしまっただけですが、みんなで励ましてまたがんばって試験を受け、二度目に無事合格することができました。

タールの圃場で、女性を中心に105名の従業員が働いてくれています。浜松のユニバーサル農業には長く関わらせていただいているので、当社では、現在障がいのあるスタッフが4名働いてくれています。障害者福祉施設のだんだんさんのお付き合いが長く、以前は利用者さんに定期的に来ていただき、ポットの土詰めをお願いしてすぐ助かっていました。

## ■想いで始めた直接雇用

そんな中、当社で雇用するようになった最初の障がい者スタッフは、当時引きこもりになっていた子でした。働き始めたのが今から約8年前です。私一人の想いで始めた直接雇用でしたが、なかなか続けて通うのが難しかったので、最初は3時間の勤務からはじめました。はじめは来たり来なかったりとい

でも、その後も彼は実際に通うのは怖いとまだ自信が持てませんでした。そこで、私達はお休みに会社の敷地内で運転の練習に付き合っていました。繰り返し練習することで慣れて、少しずつ少しずつ自信を持ててきました。ついに自分の家から会社まで通ってみるといって朝、私は心配でそばまで見に行ってしまったことを今でも覚えています(笑)

今ではフォークリフトの免許も取得しましたし、フルタイムで働けるようになりましたので、次は普通自動車の免許を取ることを目標にがんばっているところです。そんな彼と付き合っていく中で、周りのスタッフもたくさん感じるものがあつたのではないかと思います。

## ■課題の先に生まれた、組織の成長

入った頃はやはりいろいろなことがありました。障がいのある子は、元々社会経験が少ない子が多いので、会社に入っただけは、いわゆる空気の読めない言動などが出てしまうこともあります。でも、その子なりに学ぶことがあります。少しずつ空気を読んで行動することを身に付けて



左：このユニークな見た目の植物を、世の中に広めたい！とはじめた多肉植物の生産。現在は、北海道から沖縄まで全国にカクト・ロコ多肉植物を届けている。

右：カクト・ロコでは卸売のほか、カフェを併設した直売所も運営している。昨年リニューアルしたモダンなショップは、地域おこしの進む都田町において交流の拠点にもなっている。



最初に雇用した障がい者スタッフは、現在フルタイムで勤務し、土作りを担当している。自社オリジナルで配合する土は、生産にとっての要だが、卸先などでも生育が良いと評判が高い。



カクト・ロコにとって、スタッフ達は「宝」です、と野未さん。多様性のある組織づくりに今後も積極的に取り組んでいきたいと話す。

当社では、引きこもりだった彼が大きな力になってくれています。私は、カクト・ロコの中でこうした事例を少しずつでも増やしていきたいと思っています。また、40万人の中の1人ではありますが、この成功事例が他にも生まれていけば、ずいぶん社会が変わっていくのではないかと思います。

「企業は人なり」と言われます。いろんな人間がいて、育ち、組織の枝葉ができていきます。多様な人間がいるからこそ組織の厚みが増し、深みが生まれます。

私にとって、事業は「夢の遊び場」です。これから先も、カクト・ロコで働くみんなにとって夢の遊び場が続くように、多様で力強い会社を目指していければと思っています。

いきます。

一方で、障がいの特性からできないこともあります。そういう部分を、周りのスタッフもちゃんと理解し、配慮してあげられるようになっていきます。私は、こうしたことがお互いにとっての大きな成長だと思っています。スタッフ達が色々なことを受け入れてあげられるようになり、社内に優しい空気が生まれるようになりました。心が広くなると思うのでしょいか、頼もしいスタッフたちが育っていると思います。

私は、会社は大きな家族のようなものだと思っています。男性・女性、お年寄りや子供、できる子、できない子、いろんな人がいるのが家族です。会社は、そんな多様な人間が働く場。学校の先生でもきつと同じだと思ってしまう。成績優秀なお利口な生徒だけを見れば楽です。でも、実際にはいろいろな子がいて、生徒をとりまとめるのに苦労することもあってしょう。でもだからこそ、そうした場を通じて豊かな人間性が生まれ、社会に適應できるよう、みんなが成長していくのだと思います。

得意なこと、不得意なことがあるのが人間で、でこぼこしているのが普通なのです。そこに障がい者と健

常者の垣根はありません。その中で適材適所を見出し、みんなが仕事に取り組んでいく。そんな多様性のある組織であれば、この先どんなことがあっても対応していける会社になれるのではないかと思います。私達が考えていないといけないのは、今日ではなくて、未来です。障がいのあるスタッフとともに働くことで、一層大切に思えるようになったことかもしれません。

### ■たった一つの事例でも、大きな意味を持つ

現在、全国に引きこもりの方が40万人もいると言われています。社会参加ができない本人も辛いですが、それを支える家族もまた苦しい立場です。苦勞しながら、がんばっている親御さんたちをたくさん見てきました。でも、本人と家族だけではできないことがあります。

解決に進むためには、やはり社会全体の取り組みが必要です。そこに、企業が持つ役割は大きいものだと思います。お互いが協力し合える環境を作ろうと、社会そのものが考え方を変えていくことが必要でしょう。

“笑顔”つなぐ

はままつの  
ユニバーサル農業

野沢園

# 野沢登与次



上：全国的なみかんの産地である浜松市で温州みかんをはじめとする柑橘類を栽培。  
下：単純に見える草取りの作業でも、お互いにとって大きな利益が生まれる。

## profile

浜松市北区細江町を中心に、3代にわたって温州みかんなど柑橘類を栽培する野沢園を経営。浜松市のユニバーサル農業の取り組みに古くから携わり、障がい者施設との連携を行ってきた。現在、『ワークセンター大きな木』から、高次機能障がい者をリハビリの一環で受け入れている。

## ■ユニバーサル農業とのあゆみ

野沢園では、みかんの産地である浜松市北区で温州みかん、甘夏、不知火、はるみなどを生産しています。市内にいくつか点在している10箇所の圃場（計2.3ha）で色々な種類の柑橘を生産しています。

浜松市のユニバーサル農業に関わるようになったのは、約8年前からになります。全国的に見ても農福連携への取り組みが早かった浜松ですが、当時からできることをまずやってみようというスタンスでした。野沢園では、福祉施設から障がいのある子達を受け入れ、研究会の中で作業の検証などをさせていただきました。

最初に受け入れをしたのは、福祉施設の『だんだん』の利用者さんたちです。当時、みかんの収穫や枝切りなど色々な作業をお願いしたの

分の2で済むようになりました。また、今年は草刈り機をかけたつらいう木のすぐ下の箇所を重点的に草取りしてもらうようにしました。そのため、園内を草刈り機で効率よく除草できるように、今年1年除草剤を使わない栽培に挑戦してみよう！と取り組んでいます。除草剤を使うとみかんの味にも影響すると言われまじし、減らすことで環境にも優しい農業ができます。自分たちだけでは考えることもなかったのですが、『大きな木』のみなさんのこまめな仕事のおかげで、こうした農業に取り組むことができています。

草取りというあまり大きな作業に思えないかもしれませんが、夏の暑い日中に行うのは大変な作業です。嫌だな、やりたくないな、と感じるのが普通だと思いますし、来ていただくのが申し訳ないな、と最初は感じることもあったのですが、みなさんには「作業をさせてもらえて、とても助かる」と言っていたので、初めて分かったことでした。

『大きな木』の利用者のみなさんは、「高次脳機能障害」という障がいを持った方々です。元々は、普通に社会人として働いていた方が、事故や病気など様々な理由で脳に障がいを

ですが、こんなに何でもできるんだとつくづく感じたのを覚えていますが、障がいのある子達に対するイメージが大きく変わった出来事でした。

野沢園での取り組みはそれほど大きなものではありませんが、現在の取り組みについてご紹介したいと思います。

## ■小さな連携でも、お互いの利益につながる

現在、私達の農場では福祉施設『ワークセンター大きな木』の利用者さんたちに定期的に来ていただき、草取りの作業をお願いしています。暑い時期になるとみかん畑も雑草がどんどん生えてしまいますので、除草剤を撒く必要がありますが、『大きな木』のみなさんに来ていただいている畑では、除草剤の量が以前の5

負ってしまい、そのためどうしても作業できることに限りがあります。でも、こうした作業訓練を通して、可能なことを増やし、また社会に復帰して働くことを目指しています。

高次脳機能障害では失ってしまった機能が回復することはありませんが、できることを繰り返し練習し、その機能を伸ばしていくことが重要になるそうです。そうした作業訓練の場として活用していただいているのですが、単なる草取りではなく、おいしいみかんづくりにつながっているということがモチベーションにつながっているそうです。

みなさんにとって、社会との小さな接点にもなれているようで、こうした作業がうまく就労につながっていけばと私も願っています。

## ■受け入れを通じて生まれた、新たな可能性

以前の『だんだん』さんからの受け入れも、当園にとって学ぶことの多かった出来事でした。主に精神障がいを持った子達たちへ作業をお願いしたもので、秋の収穫作業から始まり、冬には枝切りの作業もお願いしました。



左：単純な草取りの作業でも、道具の使い方のコツなどで作業効率は変わる。反復繰り返すことが、リハビリの効果を高める。  
 右：障がい者の関わる商品として付加価値を伝えるため、地元のデザイン専門学校との連携事業を実施。パッケージなどの考案を学生たちとともにいった。



『ワークセンター大きな木』の利用者が定期的に行われて除草作業を行うことで、除草剤の使用が5分の2に減少した。今後は、除草剤を使わない栽培を目指している。



長年取り組んできたユニバーサル農業の取り組みが、少しずつ広がってきたことを実感している。

することは重要なことです。障がいの種類は様々ですが、そうした子を持つ親御さんの気持ちが、分かる部分も多いのではないかと思います。農福連携に取り組めることが、たくさんある農園ばかりではないと思います。でも、少しのことでも、いろいろな方ができることから取り組んでいくことで、様々な可能性につながっていくのではないかと。このユニバーサル農業に関わってきた経験から、そう感じています。農業と福祉のいい関係が、これから先も、色々な可能性を生み出していくことを、楽しみにしています。

そのときに感じたのは、あくまでこちらの基準で作業を指示するのではなく、相手の基準に合わせてあげることが大切だということです。例えば、みかんの収穫の際に、「箱に9割位詰めてね」と伝えても、9割という感覚は実は人によって違ったりします。こちらの基準を押し付けるのではなく、相手の基準や感覚をしっかりと把握した上で指示を出してあげること、作業が円滑に進むことがたくさんあります。こうした経験を通して、以前よりも、作業の指示や分析ということを経験することができるようになりました。また、こうして障がいのあるみなさんに関わっていただいたみかんと、付加価値のある商品として販売していただくというアイデアも生まれたことから、地元のデザイン専門学校とコラボレーションをし、商品パッケージなどの提案を学生さんたちにしていただきました。学生のみなさんは、みかんづくりに関わった障がい者さんたちの想いを伝えるため、様々なパッケージやリーフレットなどを考案してくれました。また、経営側の視点で見れば、新たにパッケージ商品を作るためには、やはりコストがかかります。しっかりと付加価値が伝わるも

のでなければいけませんので、みなで真剣に意見を出し合いました。福祉施設の方や、デザインを学ぶ学生さんなど、違った分野の方々と連携することで初めて経験することのできた取り組みだったと思いますし、新しい可能性を感じることもできました。

**■小さな取り組みの積み重ねを大切に**

浜松市でユニバーサル農業研究会が発足して10年以上が経ち、今では若い農業者なども積極的に取り組んでくれていて、心強く思っています。最近では、企業との連携など色々なモデルが生まれてきました。それは、以前から色々な事業モデルを検討して、実行し、検証してきた結果でもあると思います。良いモデルが地域の中で一層広がって、農業の助けになってくれれば何より嬉しいことです。実は、私の娘も障がいを持っています。なかなか社会の中で働ける場所が少ないのが現状で、ここで収穫したみかんの袋詰やシール貼りなどをやってもらっているのですが、彼女にとってもこうした作業があ